「武庫川国文」第九十号　抜刷
令和三年三月二十日　発行

王治本　明治三十九年　北海道における詩作と交流

―小樽・札幌・室蘭・函館（第二回）

柴田清継

王治本　明治三十九年　北海道における詩作と交流

―小樽・札幌・室蘭・函館（第二回）

柴田清継

㈡十月二十八日、清客王漆園招待会

『北海』で次に確認できる、王治本と札幌在住及び滞留中の人々との詩文交流は、札幌の割烹料亭の第一号とされた東京庵で十月二十八日に催された、王治本の招待会である。これを予告する十月二十八日当日の『北海』の記事をまず挙げよう。

清客王漆園招待会　関場理堂新居湘香小川黙淵諸氏の発起にて今二十八日午後一時より東京庵に於て目下滞札中の清客王漆園氏を招請し雅筵を催さるゝ由なるが当日は画家根本樵谷氏も出席し席上書画の揮毫もありと云へは定めて盛会なるべし

関場理堂については、すでに簡単に触れたが、王治本の札幌滞在中、彼は王治本を何日間か自宅に宿泊させ、自作漢詩の添削を受けていた。そうした交流の跡を窺うことのできる王から理堂への書簡も「関場理堂資料」の中にあるので、以下、必要に応じ適宜紹介することにしたい。

小川黙淵（一八六七～?）は、忠之助（ちゅうのすけ）がその名。島根県八束郡意東村の出身。当時、北海タイムス編輯長の任にあった[1]。根本樵谷（一八六〇～一九一三）は、上総（千葉県）出身の日本画家。三十八年のいつごろからか道内を漫遊していたようで、札幌では王治本同様、理堂宅に滞在していた[2]。

この日の招待会には、ほかにも数人が出席していたが、それらの人たちによって詠まれた詩篇が、十月三十一日、十一月一日、二日、五日、七日、九日にわたり、『北海』文苑に「東京庵雅集」と銘打って掲載されているので、以下、適宜詩句を取り上げつつ紹介することにする。

皮切りは湘香の作品である。

十月念八、同人相謀、招請漆園王老先生于東京庵、開雅延（ママ）、酒間賦呈　湘香　新居　敦

山光水色対烟嵐　山光　水色　烟嵐〔山に立つもや〕に対す
衰髩也堪吟筆簪　衰髩〔薄くなった髪〕もまた吟筆の簪に堪えたり
文徳風覃北海道　文徳の風は覃む　北海道
名流星聚東京庵　名流の星は聚まる　東京庵

賓鴻爪印壮心遠　賓鴻　爪　印して　壮心　遠く
叢菊香開晩節酣　叢菊　香　開きて　晩節　酣なり
此夕幸逢青眼客　此の夕べ　幸いに逢う　青眼〔喜んで迎える〕の客
同斟月下伴清談　同に月下に斟み　清談に伴(はべ)らん

第二句の「吟筆簪」は、皇帝の起居注をつかさどる侍臣が筆を耳に挟んで記録の際に備えることを意味する「筆簪」の語に「吟」をかぶせて、杜甫「春望」詩の尾聯「白頭搔更短、渾欲不勝簪」あたりと絡めて、〈髪が薄くなったとはいえ、かろうじてまだ随時詩句を書きつけるための筆も耳に挟んで（もしくは髪に留めて）携帯することができる〉ということを表現しようとしたものと思われる。

さて、開会の挨拶とも言えるような湘香のこの七絶の後、これを畳韻した同じく湘香の作が続く。一つは「畳韻似在座諸彦」という題で、他の出席者への挨拶とでも言えるもの。もう一つは「衆人既散、理堂詞長更延王先生于別楼、供晩餐。余等数人亦与焉。仍用前韻」〔衆人既に散ずるや、理堂詞長更に王先生を別楼に延きて、晩餐を供す。余等数人も亦与かる。仍お前韻を用いる。〕という題である。この後に掲載されている作品は、晩餐の時に詠まれたものなのだろう。

この後しばらく、湘香の作に次韻したものが続くが、まずは王治本の「次湘香詞宗韻、率成一律博粲」と「畳韻二首」である。「畳韻二首」を挙げよう。

畳韻二首　彩園　王治本

閒来北海覧秋嵐　閒に北海に来りて秋嵐を覧る
新旧良朋喜盍簪　新旧の良朋　盍簪〔友人の会合〕を喜ぶ
弄月吟花名士筆　月を弄び花を吟ず　名士の筆
飜経読画定僧庵　経を飜し画を読む　定僧〔座禅して入定した僧〕の庵
萍蹤万里游懐濶　萍蹤　万里　游懐　濶く
楓葉半林酔色酣　楓葉　半林　酔色　酣なり
今夕歓娯開雅集　今夕　歓娯して　雅集を開く
狂歌抜剣逞雄談　狂歌し剣を抜きて[3]雄談を逞しくせん
探覧山光与水嵐　山光と水嵐とを探覧し
游踪随処訂朋簪　游踪　随処　朋簪〔友人たち〕と訂ぶ
求仙自昔伝徐福　求仙は昔より　徐福　伝わり
老仏同郷有木庵　老仏は同郷に　木庵[4]　有り
翰墨場中看墨舞　翰墨場中　墨の舞うを看
歓娯席上覚歓酣　歓娯席上　歓び酣なるを覚ゆ
卅年寄跡扶桑地　卅年　跡を寄す　扶桑の地
対坐還須借筆談　対坐　還(な)お須いる　筆を借りて談ずるを

次は「関場理堂資料」（47-17）にも原稿が残っている、関場理堂の作品である。

十月念八、同人招請王漆園先生、席上次湘香詞宗韻　関場理堂

秋満江関多翠嵐　秋　江関に満ちて　翠嵐　多く
動将吟筆到朋簪　吟筆を動かして朋簪に到る

清醇酒溢歓娯処　清醇　酒は溢る　歓娯処
澹泊詩推老学庵　澹泊　詩は推す　老学庵〔陸游のこと〕
菊過重陽芳未褪　菊は重陽を過ぐるも　芳　未だ褪せず
天浮行雁月方酣　天は行雁　浮かび　月　方に酣なり
同人此夕邀佳客　同人　此の夕べ　佳客を邀う
筵席不妨徹夜談　筵席　妨げず　夜を徹して談ずるを

第三句には「室内所掲扁額曰歓娯処韓客李斗璜所書」との注記がある。李斗璜（一八五八～一九一六）は、雪岳と号し、一八九五年（明治二十八年）に起きた所謂閔妃事件で閔妃殺害に関与した嫌疑を受けたため、日本に避難し、各地を巡り歩いて詩文交流を行っていた韓国人である。ほぼ一年前の三十八年十月七日には、富山での地元文人の宴会に王治本とともに招待されている[5]。李斗璜が札幌を訪れた時期については、後で言及するこの招待会の出席者の一人である逸見小舫の『小舫遺稿』上に三十年の作かと見られる「与韓客李斗璜」があるのが、一つの手がかりになるだろう。

次が上述した（本誌前号四十頁下段）泉百道の作である。詩句に判読できない字があるので、作品は掲げないが、泉百道の人物について、ここで触れておきたい。筆者は以前、この件に関して、ある程度の調査を行い、その結果を発表したことがある[6]。泉重朝が本名で、尊攘論を主張して京都・長門などで活動し、慶応二年、藩内の佐幕派家老に捕らえられて処刑された泉仙介（一八二七～一八六七）――いわゆる「村松藩殉難七士」の一人――の長男である。王治本は十六年夏から十七年末にかけて越後・佐渡を漫遊するが、清仏戦争が起こった十七年当時、百道（そのころこの号を名乗っていたかどうかは未詳だが）は反民権教育結社とも評された弥彦の明訓学校に在籍していた。そこへ漫遊中の王治本が訪ねてきて、語り且つ酌んだ（明訓学校在籍時の王治本との邂逅、及び王の来幌を知った時に催した懐旧の情を述べているのが、十月二十八日『北海』所載の作品である）。さらに、百道がその後いかなる経緯で渡道したかは不明だが、三十九年の時点でほぼ知命には達していただろうということ、また、当時の『北海』文苑所載の相当な数に達する彼の作品には隠逸的な己が生き方を否定的に見るデカダン的な気分の漂っているものが少なくないということも述べた。

百道については、その後も細々とながら調査を続け、わずかではあるが判明したことがあるので、追記しておきたい。彼が在籍していた弥彦の明訓学校は、大橋一蔵（一八四八～一八八九）が十五年に興したものであるが、大橋はその後、北海道開拓のための移民事業を手掛けるようになり、北越殖民社を創立して、十九年に渡道し、石狩国空知郡幌向村字江別太（現江別市）に居を定め、開拓に着手した。「明訓校時代の同志泉重朝も来道して大橋を助けた」という。以上は『見附市史』下巻㈠[7]の第二章第三項「北越殖民社」の叙述に基づく。筆者は以前、百道は明訓学校において教師だったのか学生だったのか、判断がつきかねていたが、学生ではなかったようである。百道については、ほかにも断片的な資料を入手しているが、本稿ではこれ以上踏み込まない。いずれにせよ、『北海』文苑所載の彼自身の作品や、他の詩人が彼のことを詠んだ作品の内容から、彼は渡道後もずっと江別に住んで農業に携わっていた人であることは確実なようである。

次は、土佐の横山又吉（一八五五～一九三九）と同じ号を持つ横山

黄木である。この人については未詳だが、関場不二彦も論文を発表したことのある『蝦夷往来』誌の第十四号（一九三四年）に「蝦夷名称考」と題する論文を発表している横山貞裕がその人である可能性があるかもしれないと、筆者は思っている。作品を挙げよう。

同　　横山　黄木

山々骨立帯烟嵐　山々　骨立して　烟嵐を帯び
嘉客南来椽筆簪　嘉客　南より来りて　椽筆〔優れた文才の喩え〕を簪す
味道千秋仁義国　道を味わう　千秋　仁義の国
同文一夕酒詩庵　文を同じくす　一夕　酒詩の庵
放遨君愛林泉美　放遨〔思う存分見て回る〕君は林泉の美しきを愛し
安素我嫌名利酣　安素〔分に安んじる〕我は名利の酣つるを嫌う
晩節黄花開也好　晩節　黄花　開くや好し
酔中時做鷺鷥談　酔中　時に做さん　鷺鷥の談[8]

次は逸見小舫（一八六一～一九二八）、文鋼がその名、越中の出身、逸見病院の院長である。

同　　逸見　小舫

豊水藻山晴帯嵐　豊水〔豊平川〕藻山〔藻岩山〕晴れて嵐を帯ぶ
旗亭相集未投簪　旗亭に相集い　未だ簪を投げ〔官を棄てる〕ず
老楓残菊松間径　老楓　残菊　松間の径
月色雁声塵外庵　月色　雁声　塵外の庵
胸蓄千兵戦将止　胸に千兵を蓄えて　戦い将に止まんとし
坐迎双客興弥酣　坐に双客〔王と根本〕を迎えて　興　弥いよ酣なり
三游東海感多少　三たび東海に遊びて　感ずること多少ぞ
欲聴先生今昔談[9]　聴かんと欲す　先生　今昔の談

次は札幌農学校に留学していた清国人で王治本と同郷の、陳樹棠[10]の作品である。尾聯だけ引いておこう。

平生不識吟哦事　平生　吟哦の事を識らず
酔後聊将捫蝨談　酔後　聊か将に蝨を捫りて〔恐れ憚らず〕談らんとす

ユーモアを交えて謙遜しているが、彼の作品は他の出席者に見劣りするようなものではない（後掲）。

次は北海道庁の職員だった猪飼藻山[11]の作であるが、これも作品の掲出はしない。

次韻の最後は小川黙淵の作である。

同　　小川　黙淵

楼頭暮色鎖秋嵐　楼頭　暮色　秋嵐を鎖す
邀得真僊好盍簪　真僊を邀え得て　盍簪〔人士が集う〕するに好し

佳節清游有彭沢　佳節の清游　彭沢〔陶淵明のこと〕有り
聖時高会無澹庵　聖時の高会　澹庵　無し
聳肩白戦詩思健　肩を聳かして白戦〔素手で戦う〕し　詩思健やかに
落帽狂歌酔興酣　帽を落として狂歌し　酔興　酣なり
説到同文千古事　同文　千古の事に説き到り
歓娯不覚解頤談　歓娯して　覚えず　頤を解き〔口を開き大笑いする〕て談る

第四句は、高僧顕上人のハイレベルな茶の賞味能力を歌う南宋の楊萬里の「澹庵坐上観顕上人分茶」詩と関係があるようだが、それ以上のことは不明である。第六句の「落帽」の典故については、次に掲げる王詩の方がより適切な使い方をしている。

以上の次韻の作の次に、分韻の作が列挙されている。王治本の作から、順に挙げよう。

分韻得陽　王　漆園

佳節過重陽　佳節　重陽を過ぎ
羈愁感故郷　羈愁　故郷に感ず
髣辺蘆雪白　髣辺　蘆雪　白く
籬畔菊花黄　籬畔　菊花　黄なり
煎茗添幽興　茗を煎じて　幽興　添わり
吟詩有別腸　詩を吟ずるに　別腸　有り
登高伝落帽　登高　帽を落とすこと伝われり
莫笑孟嘉狂　笑う莫かれ　孟嘉の狂

尾聯は、黙淵同様、重陽の酒宴に招かれた晋の孟嘉が風で帽子を飛ばされたにもかかわらず平然と飲み続けた「落帽」の故事（『晋書』桓温列伝）を踏まえている。

得麻　陳　樹棠

唐響庵前月色賒　唐響庵〔東京庵のこと〕前　月色　賒し
漫将詩思向人誇　漫に詩思を将て人に誇らん
今宵有酒須醺酔　今宵　酒　有り　醺酔するを須いる〔必要とする〕
異域相於情更加　異域にて相於〔懇親する〕して　情　更に加わらん

次は仄韻を引き当てた理堂の作である。

得職　関場理堂

文星会　文星　会し
我韻仄　我が韻は仄
苦吟身欲癯　苦吟して　身　癯せんと欲し
白戦無寸鉄　白戦　寸鉄も無し
識字患之始　字を識るは患いの始め[12]
如瓶口唯黙　瓶口の如く　唯　黙せん
銀燭高焼夜未酣　銀燭　高く焼えて　夜　未だ酣ならず
美人侍座凡国色　美人　座に侍する　凡て国色
痛飲須尽三百杯　痛飲　須く三百杯を尽くすべし[13]
澆将磊磈勢難抑　磊磈〔心中の不平不満〕を澆げば　勢い抑え

難し
図南何日向誰問　南を図る〔大事業を企てる〕は何れの日ぞ
誰にか問わん
空老北溟垂天翼　空しく北溟に老ゆ　垂天の翼〔雲を凌ぐほどの壮志〕

この作品は、関場理堂資料（81）にも、詩句同様、「禿理堂得職」というユーモラスなタイトルで見え、圏点など、王治本によるチェックの跡が残っている。『北海』所載のものと若干文字の異同があるが、指摘しておくに値しそうなのは、第四句が「時酣不得北」〔時に酣にして北ぐるを得ず〕から、全く違う表現に直されていることである。ともあれ、この日の招待会で分韻の詩作は即興で行われただろうから、王治本によるチェックは即興で書いた作品を北海タイムス社に持ち込む前に行われたと想定すればいいだろうか。

小舫の「得文」の作は省略し、次に百道の作を挙げよう。

得蒸　泉　百道

詩酒相於有良朋　詩酒　相於するに　良朋　有り
紅楼買酔待月昇　紅楼　酔いを買いて　月の昇るを待つ
満堂皆是一時雄　満堂　皆　是れ一時の雄
寛平風流尤足称　寛平〔寛大で公平〕　風流　尤も称するに足る
吾輩底事独闌酔　吾が輩のみ底事（なにごと）ぞ独り闌酔[14]せる
空把禿筆媿無能　空しく禿筆〔拙い詩文の比喩〕を把って無能を媿ず

百道には、想定される年齢に似合わず己を卑下するような感じの作品がまま見られる。

得有　小川　黙淵

止談風月共忘形　止だ風月のみを談り　共に形を忘れ
傾尽清醇千百瓶　傾け尽くさん　清醇　千百瓶
盤礴依然君莫笑　盤礴〔行儀の悪い格好をする喩え〕依然　君笑う莫かれ
客游十載跡如萍　客游　十載　跡　萍の如し

「止談風月」は、『南史』徐勉伝の故事に基づき、名利の念を絶ってただ風流の事のみを語ろうと戒めるために使われる典故である。百道の作で白けた気分を立て直そうとしたのだろう。結句は、二十九年に日本赤十字社北海道支部事務委員となり、次いで北海道庁属に任官して岩内支庁第一課長を拝命し、その後、『北海時事』の記者となり、さらに北海道庁嘱託員として殖民公報編纂の任に当たり、この当時の『北海』編輯長のポストに至った[15]十年間を振り返っての感慨であるに違いない。

分韻の作の最後は、湘香の五律で、黙淵と同じく、「有」韻であるが、これは省略する。

分韻の作の後では、意外にも、さきに「平生　吟哦の事を識らず」と詠んだ陳樹棠がまず主役となり、次韻・分韻の縛りから解放された形での唱和へと移行している。

答満座諸翁　　陳　樹棠

自笑生平不作歌　自ら笑う　生平　歌を作らざるを
佳賓満座楽如何　佳賓　座に満つ　楽しみ如何
三分世事一分譲　三分の世事　一分を譲り[16]
九十光陰二十過　九十の光陰　二十　過ぎたり
魚鳥欲遊江海外　魚鳥　江海の外に遊ばんと欲すれば
山川渾老興亡多　山川　渾て老い　興亡　多し
今宵共談詩思遠　今宵　共に談れば　詩思　遠く
唐響庵中秋気和　唐響庵中　秋気　和す

丙午秋九月在北海道札幌農学校、適郷老王先生漆園路過札地見招、以詩属和。自愧菲才、雑成数句以答。〔丙午秋九月[17]　北海道の札幌農学校に在り、適たま郷老王先生漆園　札地に路過りて見招き、詩を以て和を属す。自ら菲才を愧ずるも、数句を雑成して以て答う。〕

西風頻掃世間塵　西風　頻りに掃う　世間の塵
北地秋光満目新　北地の秋光　満目　新たなり
我愧菲才佳句少　我は愧ず　菲才にして　佳句　少なく
無由強作唱酬人　強いて唱酬人と作るに由無し
破浪乗風独渡東　浪を破り風に乗りて　独り東に渡る
秋来葉落感何窮　秋　来り　葉　落ち　感　何ぞ窮まらん
誰知北海談瀛客　誰か知らん　北海　談瀛[18]の客
無限詩情想像中　無限の詩情　想像の中

遇郷老王先生漆園

萬里雲埋撥不開　萬里　雲に埋まり　撥(かきわ)くるも開かず
時聞刀斗総成哀　時に聞く　刀斗[19]の総べて哀を成すを
行人不解悲秋事　行人は解せず　悲秋の事
且問白頭何処来　且く問わん　白頭　何れの処よりか来ると
晩節黄花次第開　晩節　黄花　次第に開き
故郷風物動人哀　故郷の風物　人を動かして哀しましむ
喜翁筋力猶強健　喜ぶ　翁　筋力　猶お強健にして
跨馬長征北海来　馬に跨り北海に長征し来るを

偶感

目断江城秋暮時　目断す〔眺めやる果て〕　江城　秋　暮るる時
満山楓景動人思　満山の楓景　人を動かして思わしむ
黒風飄尽悲歌気　黒風〔激しい風〕　飄(ふ)き尽くす　悲歌の気
寒雨催成感慨詩　寒雨　催し成す　感慨の詩
萬里襟懐孤雁共　萬里の襟懐は孤雁と共にし
十年心事短檠知　十年の心事は短檠〔小さな燈火〕知らん
而今滄海横流日　而今　滄海　横流する[20]日
願定中原局面危　願わくは中原の局面　危うきを定めんことを

王治本の故郷―慈渓は現在、寧波市に属する県級市であるが、インターネット「中国寧波網」二〇一二年十月二十三の記事[21]に帰国後の陳樹棠の活躍の一コマを見出すことができる。すなわち、現在、寧波のランドマークの一つともなっている霊橋は、かつては

旧式の浮橋だったが、これを近代的な橋に改築するための構想を最も早く打ち出したのが、鄞州走馬塘（寧波郊外―筆者）の人、陳樹棠氏の一九一〇年（明治四十三年に当たる―筆者）の卒業論文だった。一九二二年以後、建設の準備に取り掛かり、戦争のため何度も中断した挙句、一九三六年に竣工した。

陳樹棠の「偶感」に教師の湘香が次韻している。

次陳樹棠兄偶感韻以贈　　新居　湘香

男子只応勤済時　　男子は只だ応に時を済うに勤むべし
学窮内外致深思　　学は内外を窮め　深思を致せ
達材肄業開心目　　材を達し業を肄わば　心目　開く
訪俗観風采史詩[22]　　俗を訪ね風を観んには史詩を采れ
一徳立身先祖顕　　徳を一にして身を立てば　先祖　顕れ
至誠従事鬼神知　　至誠もて事に従わば　鬼神も知らん
平生所養能如此　　平生　養う所　能く此くの如くんば
盤錯相逢終不危　　盤錯（複雑な難事）に相逢わんも終に危うからじ

陳樹棠としては、恩師の薫陶よろしきを得たとも言える温かい言葉として受け止めたに違いない。

雅集はまだ続く。再び「覃」韻の作である。まず理堂の「畳韻二首呈王漆園先生」であるが、第一首だけ挙げることにしよう。

畳韻二首呈王漆園先生　　理堂　陳人

清遊今日対秋嵐　　清遊　今日　秋嵐に対し
折得黄華満髩簪　　黄華を折り得て髩簪に満たす
籬送蟲声鳴竹院　　籬　蟲声を送りて　竹院に鳴かしめ
簷迎月色照松庵　　簷　月色を迎えて　松庵を照らさしむ
詩箋愧我経時染　　詩箋は愧ず　我　時を経て染まるを
酒盞逢君終夕酣　　酒盞は君に逢いて　終夕　酣なり
欲聴東亜機務論　　聴かんと欲す　東亜機務の論
更期交膝剔鐙談　　更に期す　膝を交え鐙を剔りて談らんことを

頷聯は、杜甫「旅夜書懐」詩の頷聯「星垂平野闊、月湧大江流」などと似た句法で、「蟲声」と「月色」とに句の最初の四字のまとまりの中では目的語の役目、後半の五字のまとまりの中では主語の役目を担わせようとしたものと思われる。第五句は、詩箋が王治本の添削により赤く染まっていくことを表現したもの。実際、この作品は関場理堂資料にも見え（47-19）、王治本による添削の跡と圏点とが確認できる。

泉百道は十七年に弥彦で王治本に会った時、自身は「耳熱く慷慨して時事を論」じたが、王は「謙抑して答え」なかったと述懐している（上述の十月二十八日『北海』）。筆者はこれまで王治本の三十年にわたる日本での足跡を追ってきたが、政治問題や国際問題についての意見表明をできるだけ避けようとする態度は一貫しているように思われる。したがって、「東亜機務の論」は、理堂がまだ王治本の人柄をよく分かっていなかったための「ないものねだり」だったかもしれない。

次も同韻で、湘香のこの雅集を締めくくるような「諸彦賜高和賦此以謝」というタイトルの詩二首だが、第二首の尾聯だけ挙げてお

こう。理堂の尾聯に対する反応となっている。

品花評月属吾輩　花を品（しなさだめ）し月を評するこそ吾が輩に属す
世事未応容易談　世事は未だ応に容易に談るべからず

以上が十一月七日までの『北海』文苑の掲載内容のあらましである。最後に位置する湘香の詩句（「世事未応容易談」）の後には「（完）」と明記されたのだが、八日に他の作品（後掲）が掲載された後、九日には再び「東京庵雅集」の作品が掲載されている。編集者の全体的な見通しが十分でなかったか、もしくは新たな投稿があったか、いずれかであろうと思われる。

まず王治本の「次湘香詞宗韻三首」であるが、第三首は前に挙げた「探覧山光与水嵐」で始まる一首と基本的に同じである（「探」が「貪」になっているのを含め、三字の異同のみ）。第一、二首を掲げよう。

次湘香詞宗韻三首　彩園　王治本

惆帳秋風対夕嵐　惆帳す　秋風　夕嵐に対するを
廿年官海早投簪　廿年　官海　早に簪を投げ〔官をやめる〕たり
紀勝聊賦新詩句　紀勝〔名勝を記す〕聊か賦す　新詩句
博古殊慙老学葊　博古〔広く昔の事に通じている〕殊に慙ず
老学葊[23]
美酒香濃人易酔　美酒　香り　濃くして　人　酔い易く
孤燈影冷夢方酣　孤燈　影　冷ややかにして　夢　方に酣なり
相逢半是曾相識　相逢う　半ばは是れ曾て相識れり
追溯当時別別談　当時を追溯して別別に談らん
重陽難得遇晴嵐　重陽は晴嵐に遇うを得難し
笑折黄花当彩簪　笑いて黄花を折り彩簪に当つ
碧水丹山行楽地　碧水　丹山　行楽の地
琴床茶竈定僧菴　琴床　茶竈　定僧の菴
把杯欲向青天問　杯を把り　青天に向かいて問わんと欲す
闘韻偏教白戦酣　闘韻　偏に白戦をして酣ならしむ
探勝漫留題壁句　勝を探り　漫に壁に題する句を留めたれども
羞将伝布作奇談　羞ずらくは伝布〔伝播〕して奇談と作らんこと

第一首第七句で述べている「曾相識」（かつての知り合い）として、筆者に確認できるのは泉百道だけである。第一首末句の「別別」は中国語本来の言い方ではないだろう。長年にわたる滞日のためしみ込んだ言葉か、あるいは逆にそれを承知でおどけて使ったものか。

次は百道の作である。

同疊韻　泉　百道

孤月離山懸夕嵐　孤月　山を離れて　夕嵐　懸かる
相於聊以脱巾簪　相於し　聊か以て巾簪を脱せん
東洋文物推君国　東洋の文物は君の国を推し
北海風流属此庵　北海の風流は此の庵に属す
妙舞綾歌同勝賞　妙舞　綾歌　同に勝賞し
放吟縦飲共高酣　放吟し　縦（ほしいまま）に飲み　共に高酣〔大いに酔う〕せん
休嗤五十狂猶在　嗤う休かれ　五十にして　狂　猶お在るを
耳熱還為時事談　耳熱くして還た為さん　時事の談

第三句の「君国」は、本来「国に君となる」の意味（『大漢和辞典』巻二、八四九頁）だから、百道の使い方は和習と言わざるを得まい。尾聯は、二十二年前の王治本との最初の出会いの時のことを踏まえている。

次は高田香風の作である。この人については、その名が喜四郎ということ以外は未詳である。

同　　高田　香風

歳属豊穣愛霽嵐　歳は豊穣に属し　霽嵐を愛す
此生未暇問朝簪　此の生　未だ朝簪〔都の役人〕を問うに暇あらず
文明大化周辺土　文明　大いに化す　周辺の土
雅談名流集一庵　雅談　名流　一庵に集う
添興蓄音機甚妙　興を添えて　蓄音機　甚だ妙に
合歓緑蟻酒尤酣　歓を合して　緑蟻酒　尤も酣なり
今宵幸遇真儒者　今宵　幸いに真の儒者に遇い
酔話曾無須筆談　酔話　曾（つい）に筆談を須いる無し

分韻得肴

蚌□相争奈世嘲　蚌□相争う　世　嘲るを奈せん
人間何学虎狼咆　人間　何ぞ学ばん　虎狼の咆ゆるを
従来四海皆兄弟　従来　四海　皆　兄弟
永好宜為膠漆交　永く好（むつま）じく　宜しく膠漆の交わりを為すべし

第一首第二句の「朝簪」は、「朝廷の官員の冠飾で、しばしば中央勤めの官吏の意味で使われる」[24]語であるから、それがこのような形で使われているのは、香風が地方の官吏であったことを示しているようにも思われる。第五句の「蓄音機」は漢詩に不似合いな感じのする言葉だが、それを承知で敢えて使ったのだろう[25]。第二首起句の第二字は『北海』マイクロフィルムのこの部分が判読しがたかったため「□」としたのだが、「鷸」である可能性が高い。

「東京庵雅集」連載の最後は、次の聯句で締めくくられている。

聯句

裙屐喜逢詩酒僊　裙屐　逢うを喜ぶ　詩酒の僊［王漆園］
聊将蕉鼇話前縁　聊か蕉鼇を将て前縁を話さん［陳樹棠］
月夕不辞酒百千　月夕　辞せず　酒　百千［猪飼藻山］
占断江湖風月権　占断す　江湖の風月の権［泉百道］
罇雖常満坐無絃　罇は常に満つと雖も　坐に絃無く［関場理堂］
筆舞墨飛自別天　筆　舞い　墨　飛び　自ら別天［逸見小舫］
平生只有独労賢　平生　只だ独り賢を労する有るのみ［新居湘香］
不恨尊前酔後顛　恨まず　尊前　酔後　顛るるを［横山黄木］
吾亦山字聳唫肩　吾も亦　山字　唫肩を聳かす[26]［高田香風］
素懐了得翰墨筵　素懐　了し得たり　翰墨の筵［小川黙淵］

（完）

関場理堂資料所収の東京庵雅集翌日―二十九日、宿泊先の山形屋からの王治本の書信（関場理堂資料書信十三）には、「昨夕歓会、極承優渥」として、感謝の念が表明されている。

㈢札幌雑詠十六首

新居湘香が「先生来札幌、未及経信宿、已成許多詩。老蒼清平、八叉不啻。敬々服々。」〔先生　札幌に来り、未だ信宿〔二三日〕を経るに及ばずして、已に許多の詩を成す。老蒼清平、八叉[27]も啻ならず。敬々服々。〕と評した王治本の作品が十一月八日の『北海』文苑に載っているが、時系列という点では、ここで取り上げておこう。便宜上、各首に通し番号を冠することにする。なお、本作は関場理堂資料（81）にも見えるが、第十一首以下の配列に相違があり、該資料の末首は『北海』所載のものの第十二首である。

札幌雑詠十六首　　彩園　王治本

①我従樽港向東来　我　樽港より　東に向かいて来り
轆轆車程繞海隈　轆轆〔ゴトンゴトン〕　車程　海隈を繞る
行尽水窺山複[28]山処　水窺まり山複する処を行き尽くして
陟看平野谿然開[29]　陟りて看る　平野の谿然として開くを

②蔓草密[30]煙荊棘場　蔓草　密煙　荊棘場
村居稀少地荒涼　村居　稀少　地　荒涼
卅年移殖無遺力　卅年　移殖して　遺力　無く
幃幌宏開砕錦坊　幃幌　宏く開く　砕錦坊

③十年開拓費辛勤　十年　開拓　辛勤を費やし
爾宅爾田属使君　爾が宅　爾が田　使君に属す〔長官のおかげだ〕
六尺銅身容宛在　六尺の銅身　容　宛も在るがごとし
千秋瞻仰感遺勳　千秋　瞻仰〔仰ぎ見る〕し　遺勳に感ず

④成川鴨閘水回蟠
西接銭函東月寒
二百餘町経界正
分明街市似棋盤

成川〔創成川〕　鴨閘〔鴨々川の水門〕にて
水　回蟠し
西は銭函に接し　東は月寒
二百餘町　経界　正しく
分明なる街市　棋盤に似たり

⑤円山社裏闘公園
裙屐紛来笑語喧[31]
愛是暮春桜盛放
幾疑游到墨江村[32]

円山社裏　公園　闘く
裙屐〔お洒落な坊ちゃんたち〕紛く来り
笑語　喧し
愛す　是れ暮春　桜　盛んに放くを
幾ど疑うらくは墨江〔墨田川〕の村に游到ぶならんかと

［円山桜花］

⑥軽川温液瀉沄々
浴罷還宜酌一罇
秋暮楓林妍似錦
停車坐看到黄昏

軽川の温液〔温泉〕瀉ぎて　沄々〔水しぶきを上げて速く流れるさま〕
浴し罷わらば　還お宜しく一罇を酌むべし
秋暮の楓林　妍しきこと錦に似たり
車を停め　坐ろに看て黄昏に到る[33]

［軽川楓葉］

⑦創開別院誦菩提
老衲由来本姓西
新築鐘楼高百尺

別院を創開して菩提を誦う
老衲〔老僧の自称〕は由来〔これまでずっと〕
本　西[34]を姓とす
新築す　鐘楼　高さ百尺

蒲牢一杵暫[35]雲低　蒲牢〔鐘〕一たび杵けば　暫雲（ぼうん）低し
［西院暮鐘］

⑧東橋々下瀉湍流　東橋〔豊平川に架かる橋〕々下　湍流〔速い流れ〕瀉ぐ
蘋白蓼紅水駅秋[36]　蘋　白く　蓼　紅なり　水駅〔水辺の舟着き場〕の秋
貪賞良宵天一色　貪賞〔思う存分めでる〕す　良宵　天一色
載将明月□[37]扁舟　明月を載せて　扁舟に（又は、を）□
［東橋秋月］

⑨二川盤曲[38]繞平坡　二川〔豊平川と鴨々川〕盤曲して　平坡を繞る
園内双池漾碧波　園内の双池　碧波　漾う
軟草長松風颯颯　軟草　長松　風　颯颯
夏来倍覚晩涼多　夏　来りて　倍ます覚ゆ　晩涼　多きを
［中島晩涼］

⑩藻岩高処白雲封　藻岩〔藻岩山〕の高き処　白雲　封ず
函海東来第一峯　函海　東来〔函館より東の一帯で〕第一峯
積雪経春消不尽　積雪　春を経ても　消え尽くさず
令人也喚玉芙蓉[39]　人をしてまた玉芙蓉とも喚ばしむ
［藻岩霽雪］

⑪一彎篠路傍平川[40]　一彎の篠路　平川に傍い
半是漁船半客船　半ばは是れ漁船　半ばは客船
看取潮来風力順　潮　来り　風力　順なるを看取し
帰帆恰帯夕陽懸　帰帆　恰も夕陽を帯びて懸けたるがごとし
［篠路帰帆］

⑫邱珠一望尽平疇　邱珠〔現札幌市東区に属す〕は一望　尽く平疇〔平らな畑〕
築圃登場慶有秋[42]　圃（はたけ）を築き場に登せ〔収穫を終える〕て　秋有る〔豊年〕を慶ぶ
雁隊[43]警寒飛欲下　雁隊　寒さに警〔用心〕して　飛びて下らんと欲し
一行也作稲粱謀　一行　また稲粱の謀〔鳥が食物を探し求めること〕をも作す
［邱珠落雁］

⑬豊平館樹甚煇煌　豊平館[44]　樹　甚だ煇煌〔きらびやか〕たり
奇草珍花繞画[45]廊　奇草　珍花　画廊を繞る
曾憶当年留聖駕　曾（すなわ）ち憶う　当年　聖駕〔天皇の乗り物〕留まりしとき
屏風占得御鑪香　屏風　御鑪〔天皇の香炉〕の香を占（し）得めたりしならん

⑭偕楽園亭旧有名　偕楽園亭　旧（もと）　名有り
岩村拓使暢幽情　岩村拓使〔岩村通俊開拓使判官〕　幽情〔風雅な思い〕を暢べぬ
惜今冷落游人少　惜しむらくは　今　冷落して　游人　少

なく

老樹蒼蒼野鳥鳴　老樹　蒼蒼として　野鳥　鳴く

⑮農学課程此独優　農学課程　此れ独り優るるも

兵科工業也兼脩　兵科　工業もまた兼ね脩む

我邦喜有英髦士　我が邦　喜ぶ　英髦の士　有り

立雪甘従萬里游[46]　雪に立ち　甘んじて萬里の游に従うを

⑯平岸村辺牧畜場　平岸村辺　牧畜場

歌詩誰謂爾無羊　詩（『詩経』）を歌わん　誰か謂う　爾羊　無しと

其□九十群三百　其□九十　群れ三百

芳艸芊々臥夕陽　芳艸　芊々（盛んに生い茂るさま）として夕陽に臥す

第二首結句は、唐の裴度が銀杏の木百株が植えられた林を所有していて、そこを砕錦坊と名付けたという故事（五代の馮贄『雲仙雑記』巻六）を踏まえた表現。第三首転句の「六尺銅身」とは、明治の初年開拓長官として北海道の開拓を指揮した黒田清隆（一八四〇～一九〇〇）の、大通西7丁目に建てられている像のことである。三十六年に除幕式が行われた[47]。第十五句結句の「立雪」は、禅宗の二祖慧可が師の達磨に広く衆生を済度してほしいと願い入れるため、徹夜して大雪の中に立ち、世が明けると膝より上まで雪が積もっていたため、達磨が感動したという『景徳伝燈録』慧可大師所載の故事に基づき、僧が真剣な気持ちで仏の教えを求めることを表す典故。ここでは陳樹棠の日本での真剣な学習をたとえていること、言うまでもない。第十六句は、第二、三句で『詩経』小雅「無羊」の言葉を使い、平岸村（現豊平区）の牧畜場の様子を表現しようとしたものであることには違いないだろうが、判読しがたい字（うしへんの字であることは確かである）もあり、具体的なイメージは今一つはっきりしない。

本作掲載当日の『北海』文苑には、理堂の「十六首珠玉一貫。幌府憑君頓生光彩。其意則古而句則嶄新。不堪敬服。」〔十六首　珠玉一貫す。幌府　君に憑りて　頓に　光彩　生ず。其の意は則ち古くして、句は則ち嶄新なり。敬服に堪えず。〕との評も載っている。（未完）

注

1　金子信尚著作兼発行『北海道人名辞書』（一九二三年）。なお、石川啄木の「小樽のかたみ」（『石川啄木全集』第五巻（筑摩書房、一九七八年）所収）にもその名が出てくる。

2　筆者は北海道における根本樵谷に関する資料として、次の二つの新聞記事を見出している。一、『小樽新聞』三十九年八月十五日の「根本樵谷氏来樽」と題する記事：「昨年来樽せし東京の画家根本熊（ママ）谷氏は此程来樽花園町若桑久吉氏方に滞在して揮毫しつゝありと」。二、『北海』三十九年十月十一日の「画家根本樵谷氏」と題する記事：「既記の如く画家根本樵谷氏は昨日来札大通西四関場不二彦氏方に滞在し汎く揮毫の需（もとめ）に応ずる由」。

3　余興としての詩吟・剣舞を言うものと思われる。

4　木庵は福建の出身で、明国から渡来した臨済宗黄檗派の僧、木庵性瑫（一六一一～一六八四）。

5　拙稿「王治本　明治三十八年秋冬　越中・加賀・越前等における詩文交流」

（『日本語日本文学論叢』第十三号、二〇一八年）八十二～八十三、一一三頁。

6　拙稿「王治本　越佐の旅およびその間の詩文交流―追補」、『新潟県文人研究』第十七号、二〇一四年。

7　見附市史編集委員会編『見附市史』下巻㈠、見附市役所、一九八三年。

8　「倣鷺鷥談」は一応こう訓読してみたものの、読解できない。

9　本詩は『小舫遺稿』では「東京庵雅集　十月念八同人招請王漆園先生席上次湘香詞宗韻」という題で、詩句に次のような異同がある。旗亭相集⇓歓娯佳節、残菊松間⇓幽菊籬辺、戦将止⇓多逸興、興弥⇓入高。

10　『札幌農学校一覧　自明治三十九年至明治四十年』（札幌農学校、明治四十年三月十四日）第十一章　学生生徒名（明治三十九年十二月末日現員）に「土木工学科　第一年級生徒」として「陳樹棠　清国人」とある。

11　『明治四十年十月一日現在　北海道庁職員録』に「秘書係　属　五級　文官普通試験書記、文官普通懲戒委員会書記　猪飼知　北海道平民」とあるのが、猪飼藻山であろうと思われる。

12　本句は蘇軾の「石蒼舒醉墨堂」詩の「人生識字憂患始、姓名粗記可以休」の句を踏まえること、言うまでもない。

13　このような内容の句は自然に口を衝いて出てくるようにも思えるが、一応李白の「将進酒」の「会須一飲三百杯」の句を踏まえていると記しておこう。

14　この「闌酔」は「爛酔」（泥酔すること）と同義と見ていいだろう。

15　前掲『北海道人名辞書』。

16　本句は「世事譲三分、天空地闊。～」（凡そ物事は三分譲歩すれば、心の中の煩悶がなくなる。～）という諺をもじって、人生の何分の一かはすでに過ぎたということを言おうとしているものかと思われる。

17　これは陰暦。この年の陽暦の十月二十八日は、陰暦では九月十一日。

18　「談瀛」は李白の「夢游天老吟留別」詩の詩句に基づき、「海外の事を談論する」意。

19　昔の行軍用の道具―「刁斗」のこと。鍋として炊事に使うとともに、夜間はたたいて時間を知らせるのにも使った。

20　「滄海横流」は政治が混乱し、社会が動揺している意。

21　http://www.cnnb.com.cn　中国宁波网　二〇一二年十月二十三日　07:14「5位老宁波开『阿拉灵桥』微博　和你说说灵桥的那些事」。

22　「史詩」は、これまでの社会の姿や人々の生活を映し出した長編の叙事詩。

23　「老学葺（庵）」は陸游晩年の書斎の名。ここでは陸游その人とその著書―『老学庵筆記』とのイメージが重ね合わされている。

24　『漢語大詞典』第六巻一三二八頁。

25　『日本国語大辞典』の「ちくおんき」の項には、蓄音機は「（一八）九二年に国産のものがつくられた」とあり、一八九二年（明治二十五）の尾崎紅葉の「三人妻」の用例などが載っているが、三十九年の時点でも「新生事物」の印象が強かっただろうと推察される。

26　本句は、孟棨の『本事詩』嘲戯所載の故事に基づき「人の体が痩せこけている」ことを表す「山字肩」と、詩を吟じるときそびやかす（とされる）詩人の肩を言う「吟肩」とをミックスした表現。

27　八回手をこまねく間に八韻ができたという唐の温庭筠のこと（『全唐詩話』）をいう。

28　「窺」は関場理堂資料（81）に「窮」に作るのを妥とする。「水窮山複」は、陸游「遊山西村」の「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」を意識した表現か。

29　本句は関場理堂資料（81）では「欣看大地豁然開」となり、「大地」の右側に「曠野」と書き添えられている。第六字は、『北海』の方が妥である。

30　「密」は関場理堂資料（81）に「寒」に作るのを妥とする。

31 本句は関場理堂資料（81）に「高樹低苑圧画軒」〔高樹　低苑　画軒を圧す〕に作る。

32 本句は関場理堂資料（81）に「風流化粧最消魂」に作る。

33 本句は杜牧「山行」詩の結句を下敷きにしていること、言うまでもない。

34 この「西」は小題の「西院」のことだろうが、西院とは西本願寺札幌別院（現中央区北3条西19丁目）のことかと思われる。

35 「暫」は関場理堂資料（81）に「暮」に作るのを妥とする。

36 承句以下三句は関場理堂資料（81）に「紅樹紅干好放舟。正是秋涼明月朗、玉蕭声裏夜憑楼。」〔紅樹　紅干　舟を放つに好し。正に是れ秋涼　明月　朗らかなり、玉蕭声裏　夜楼に憑る。〕に作る。

37 『北海』マイクロフィルムのこの個所、判読困難。

38 「盤曲」は関場理堂資料（81）に「活水」に作る。

39 本句は関場理堂資料（81）に「也堪喚作玉芙蓉」〔また喚びて玉芙蓉と作すにも堪えたり〕に作る。

40 本句は関場理堂資料（81）に「一湾篠路傍前川」に作る。

41 篠路（現札幌市北区）は幕末より前、サケ・マス漁場として始まった集落。

42 「慶有秋」は関場理堂資料（81）に「已早秋」に作る。

43 「隊」は関場理堂資料（81）に「陣」に作る。

44 豊平館は現中央区中島公園内にある高級ホテル。最初の利用者は明治天皇で、十四年の札幌行幸の時、行在所に用いた。

45 「画」は関場理堂資料（81）に「曲」に作る。

46 本句は関場理堂資料（81）に「万里担簦来此游」に作る。

47 黒田清隆像に関しては、札幌市立中央図書館調査相談係の中根氏に多くのご教示をいただいた。

（しばた・きよつぐ　本学名誉教授）